

博士論文要旨

学籍番号		氏名	
1219002		金子 洋美	
論文題目	産後初回健診までに母子が抱える困難ごとをふまえた看護のあり方に関する研究		
<p>目的: 産後初回健診までの母親が抱える困難ごとと、これらの困難ごとに関する看護職者の思いや認識、実践上の工夫を明らかにしたうえで、妊娠期から産後まで継続した支援の考案と試行評価をし、産後退院後を見据えた母子への支援のあり方を探求する。</p> <p>方法: 【研究Ⅰ】 産後初回健診までに母子が抱える困難ごとをインタビューで把握する。退院後を見据えた看護実践の現状を明らかにし、母子への看護実践における課題を明確にする。【研究Ⅱ】 産後退院後から初回健診までに母子が抱える困難ごとをふまえた看護方法を考案し、考案した看護方法（案）を試行した後、看護方法を修正する。【研究Ⅲ】 産後退院後から初回健診までに母子が抱える困難ごとをふまえて考案した看護方法を実践する。産後退院後の母親へのインタビューの実施と評価の内容を含め聴取する。【研究Ⅳ】 研究Ⅰ～Ⅲを通した取り組みの成果を把握する。倫理的配慮：個人情報の取り扱いに関する法律を遵守し、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文審査部会の承認を得た（通知番号 2021-00D1-3 2021 年 6 月承認）。</p> <p>結果: 【研究Ⅰ】 母親 6 名にインタビューをした結果、困難ごとには、【授乳で眠れず、疼痛で身体が辛い】【サポートを依頼するのに遠慮があり、1 人で育児するのは大変】【複数の子どもを育児する大変さ】【児の哺乳量がわからず不安】【自分にあった方法を選択して対処できない】があった。看護実践の課題は、疲労や疼痛の支援や、母子の相互作用に応じた支援、母親の望むサポート支援、見守りや自己効力感が高まる支援の取り組みが必要であった。【研究Ⅱ】 原案で行動方針を示し母親 3 名に試行した。原案 1. 「産後退院後の母親の生活が円滑に行える身体の回復かアセスメントし、母親自身が気づき対処できるように関わる」では、母親自ら回復の程度を気にかけて治療の自己選択ができた。原案 2. 「母子の相互作用に応じた授乳が工夫できるように継続して支援する」では、助産外来の病棟訪問により病棟助産師と母親の 3 者が共通理解し支援方法を導き出せた。原案 3. 「母親にあったサポート支援が母親自身で選べるように関わる」では、母親自ら支援を依頼でき、市町村の育児支援を調べる行動に繋がった。原案 4. 「自己効力感の高まりを母親自身が気づけるように意識的に関わる」では、看護者の声掛けを心強く感じる経験を通して自己効力感を高めていた。【研究Ⅲ】 原案に産後ケアの活用を伝えることを追加し、母親のサポート支援の選択肢が広がった。原案は全ての母子に実践され活用が可能であった。【研究Ⅳ】 【看護支援の共有のために看護記録に記載をするようになった】【専門性の高いケアは依頼をし、母親の急性期の状況が把握できるように連携をとるようになった】【母親側のアクションが多くなりスタッフが対応するようになった】【専門職と母親から知識と技術を継承するようになった】【母親の生活に関心を持ち介入するようになった】【声掛けや活用できる選択肢を提供し自己効力感を維持するようになった】【長期的な母乳支援は柔軟になり母親が安心するようになった】という成果があった。</p> <p>考察: 産後初回健診までに母子が抱える困難ごとをふまえた看護支援は、「困難ごとと安寧な思いは隣り合わせにあり、困難ごとは誰にでも起こり得ることを認識する」ことが重要であり、「母親の持てる力による解決能力を向上させる支援」が必要である。その支援は、母親自身が自分の状況を認知し、声に出して支援を求め、必要な支援を選択し、自己効力感の高まりを母親自身が気づくことであると考えられる。専門職は、これらの支援を全ての母子に必須の支援として先行的に提供する役割があると考えられる。</p>			

(別記様式 7)

番 号 :

令和 5 年 2 月 15 日

令和 4 年度博士論文審査結果報告書

主 査	梅津 美香
副 査	北山 三津子
副 査	森 仁実

令和 4 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号 : 1219002

氏 名 : 金子 洋美

審査結果 : 1. 合格 2. 不合格 3. 保留

[審査結果要旨]

(1,000 字以内)

論文題目「産後初回健診までに母子が抱える困難ごとをふまえた看護のあり方に関する研究」は、看護職とともに取り組む実践を通して、すべての母子が産後早期に遭遇し得る困難ごとに対処できるよう、産後入院中の支援を核に母子への支援のあり方を追究する研究である。

対象施設で出産した母親から把握した産後初回健診までに困難であったことと、産後退院後を見据えた看護実践の現状から課題を明確にし、看護方法の原案を考案して 3 事例に試行、修正した看護方法を用いた 3 事例への実践と看護の評価、取組み全体の成果の確認という研究過程全体について、病棟と外来の看護職からなるコアメンバーを中心としてスタッフ全員にかかわり、着実に推進し、取組みにより母親の言動が主体的になる等の変化がみられたことを記述している。産後の困難ごとはすべての母子が遭遇するものと捉え、母親の問題解決能力を高める支援の重要性を指摘し、そのためには、医療機関内における病棟と外来の連携が不可欠であるとした。

本研究は、産後退院直後の不安定な時期にある母子が、自らのもてる力を発揮して問題解決していくことを支える産科医療機関における予防的な看護支援の意義を示しており、地域における産後ケアの充実に貢献するものであると考える。

審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。

当該学生は審査委員会に 4 回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。